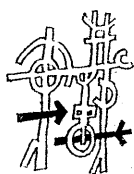


役せるもの、或いは未来に活躍せんとするもの等無数の菩薩が各々の個性を有し、人格を有する大乘の菩薩として説きだされた。

この様に、アビダルマが人間の究極の目的は成阿羅漢であつて仏陀と明確に区別し、しかもそれは出家者中心にとかれたのに対して大乘の菩薩思想は出家、在家を問わず一切衆生すべて成仏まぢがいなしとする高い立場に立つて人間というものを考察せんとしたのであつた。そして大乘菩薩の具体的実践道として六度が説かれ、これを修して一切衆生のためにならずや成仏せんとする決意を表わすものとして誓願の思想が新たに説きだされ、西紀一〜二〇にかずかずの大乘經典が経纂され、華嚴大本、大品般若の出るにおよんで、大乘の菩薩思想は一応完成されたのである。



「肇論」に於ける般若思想の考察

仲 野 禪 祐

鳩摩羅什門下の四哲と称される一人に僧肇がある。長安の貧困な家庭に育つた彼は自らその生計を助ける為、書物の筆写修理に雇われ、それに専心する内に彼の生れながらの秀れた才能をして經史等の古典に通じ、殊に老莊を愛好する様になつた。しかしこの老莊に於いて尚、心に万足出来ぬ点があり、後に支謙訳の維摩經を見てこれぞ帰すべきものなりと感激し出家して大乘經のみならず小乗の三蔵にも通ずる様になつた。のち羅什に師事した僧肇は、羅什によつて導入せられた印度の般若系大乘教學をつぶさに教授せられ、当時老莊玄学の「無」の思想と般若の「空教義」とを論究するに盛んであつた格義仏教に対し、あるいは中国仏教思想界に対して羅什によつて得た自己の確信を述べるに至つたのである。かゝる彼の論述を集めたのが、「肇論」である。肇論は四篇の論文即ち「物不遷論」、「不具空論」、「般若無知論」

「涅槃無名論」より成り、その所論を要約した序章ともいふべき宗本義を冠して後に何人かによつて篇纂されたものである。

格義仏教なるものによつて仏教の眞の理解はどうてい望めなかつた当時の中国に於いて彼の論理は老莊的言辭こそ用いているが、一応在來の仏教理解から脱し、眞の理解へと向かわしめる重要な役割を果しているものという事が出来よう。

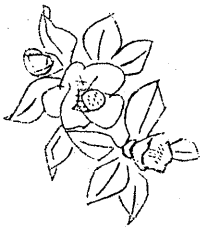
かゝる観点から一応四篇の論文各々についてその所論を見て行かねばならぬのである。「物不遷論」、「不真空論」の二論は、智度論、大品般若を始め中論を引用し、いわゆる竜樹系の仏教によつて在來の中国の般若學と老莊的な現象論の誤謬を正そうとしたものである。般若の智、即ち第一眞諦に立脚すれば時間的變遷も否定され縁起生の一切の事象の空性が大觀せられ、こゝに無礙自由の宗教的境地が開顯せられるのである事を力説している。「般若無知論」も僧肇が羅什より教えをうけた竜樹、提婆の般若義を理解した所に立つて、竜樹仏教を末だ知らざる中国思想界に対し仏説の眞義を伝えようとするもの

である。その要は即ち對立性なき實在は、對立性なき知によつて把握される事を説いたものである。即ち對立を絶した境地が眞の解脱の境地であり涅槃の境地であり、道の世界なる事を説くものである。さらに言うなれば有即無、無即有なる相即性、轉換性を説くのである。最後の「涅槃無名論」は、中国仏教界に於て最初に涅槃という主題を取り上げ、しかも涅槃の要義を核心として仏教學上の諸々の重要な関連した教義を自ら整理したという意義は何としても見逃がす事は出来ない。こゝでの要旨は、涅槃は無著なる體驗の世界であるから、分別の立場に立つてこれを表現せんとしても到底その眞をとらえる事は出来ぬと説くものである。

以上が各論の大意であるが、僧肇がこれだけの論理を提出する背後には言うに及ばず羅什による新鮮なる影響の大なる事を見逃す事は出来ない。彼は又當時の格義の三家を破斥している。格義仏教に対し自己の意見を述べるに止どまらず、その一々について誤りをするべくついているのである。三家とは即ち心無説、即色説、本無説である。この三般若説に対してはいずれも言家に即して

言象を否定しない事を指摘し、心無説は主観の無心によつて無執着を説きつゝも万物の空をいわない。即色説も色の相対性を強調するが相対性そのものは空性の理由にはならない。本無説は本無をたつとび全てを無に帰して言象を評価する意欲をもたぬものであると破斥するのである。

だがこゝで一つ彼が中論を引用して論を進めている物不遷論に於ける論理に於いて中論のそれと異つた理解をしている点が存する。即ち真諦は俗諦を根拠づけ、俗諦は真諦の仮設であるという理解に欠けるのである。やはり老荘に育つた彼は純粹に仏教の真意をつかむに至らなかつたのであろうか。しかしいずれにせよ彼の論理は従来の中国仏教界に対し老荘的無の思想と結び合つて理解されていた般若学を正し、中国仏教を仏教独自の教義顯示の方向へと大きく一步をふみ出さしめた意義は大きい。



「原始仏教に於ける縁起について」

名 古 屋 隆 真

宗教実践の理論の中心である縁起説は、三法印の上組織づけられている。この三法印即ち仏教真理に対する有情の心身のとるべき態度は人間仏陀によつて顯示されたのである。それは形而上学問題の否定であつて、無記説に見られる如き問に対する沈黙の内容が、仏教真理に対する有情の心身のとるべき態度を教えてくれるのである。それは即ち法の認識による事実の判断である。

和辻博士のいわれる真実の認識とは、この法の認識であつて、真理と受け取ることである。即ち自然的立場を止揚した本質直観の立場に立ち、実践的現実の如実相を見ることである。この現実の如実相を仏陀は、宗教的直観によつてみいだされたのであつて、無常なるものを無常とみられたのである。存在するものの法を無常だとみられたとき、すべての現象的存在は、苦であり、無我である云う真理性を明らかにされ、更に縁起であると云